第 32 回麻布環境科学研究会　一般演題 4

英語教育の目指すべき姿
―大学受験科目としての英語の変革―

吉浜　康次

麻布大学 生命・環境科学部 非常勤講師

キーワード：
英語教育，大学受験，TOEFL，英語が使える日本人，戦略構想

発表概要：

今年より，小学校において「外国語活動」という名の英語学習が始まりました。また 2009 年に終了してしまいましたが，英語教育の先進事例となるスーパーイングリッシュランゲージハイスクール研究を行うなど，英語教育に関わる取り組みは 2002 年の「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」（以下，「戦略構想」）の発表以来，その内容は抜きにしても英語教育への取り組みが形となっていることは，評価できることだと思う。

しかし，「戦略構想」が目的とする「英語が使える日本人」では大学卒業時までに「国際社会に活躍する人材等に求められる英語力」が，高校卒業時までに「日常の話題に関する通常の会話（同程度の読む・書く・聞く）ができる（高校卒業者の平均が英検準 2 級～ 2 級程度）が求められている。

この目標を考慮するとこのままでいいのだろうか。長年，大きな変化のない大学入試を変えることなくして，こうした目標は達成できないと考える。具体的な案として，北米の大学・大学院で非英語母語話者に課せられる英語力の証明テストである Test of English as a Foreign Language（TOEFL）を大学入試の代わりに用いることを提案する。

なぜ大学入試：

学生数が減っていても，大学の数や有名大学の入学志願者数はそれほど変わっていない。つまり，入学希望者の競争はより厳しくなっていると考えることができる。それゆえ，受験で用いられる英語のテストは選抜するためのテストであり，文部科学省の目指しているような英語力を測るテストにはなり得ない。

以下の資料は Power Point にて示す。

- 学生数と大学の数の変化
- 都内有名大学入学志願者数の変化
- 入試問題に関する調査

なぜ TOEFL：

文部科学省が掲げる英語の 4 技能（読む，聞く，書く，話す）を使い，尚且つ 4 技能別の達成度を客観的に示すテストは TOEFL となる。またこのテストは留学生が留学先で英語を母語とし，英語で教育を受けてきた学生達との大学・大学院レベルの授業についていくための基礎力を測るものである。授業では日本でも同じだが，4 技能が低くては授業についていくことは難しいだろう。

以下の資料は Power Point にて示す。

- TOEFL の妥当性と信頼性

まとめ：

TOEFL が文部科学省の目指す「英語が使える日本人」という目標に近づくのに有効であるという主張をしてきた。ただし，TOEFL での高得点だけをもって英語の運用能力の完成とはならないだろう。それは我々が日本語を使うことを考えれば理解しやすいと思うが，言葉は使うことなくしては鍛えられないからである。我々が使うことによって母語を習得してきたように運用能力の基礎を TOEFL で固めたら，実際に使うことが，目標達成には不可欠であると考える。